



Title	石貨の島からの声 : ヤップ島の歴史的音楽民族誌
Author(s)	小西, 潤子
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40519
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 小 西 潤 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 13600 号

学 位 授 与 年 月 日 平成10年3月25日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科芸術学専攻

学 位 論 文 名 石貨の島からの声ーヤップ島の歴史的音楽民族誌ー

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 山 口 修(副査)
教 授 土 岐 哲 助 教授 永 田 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、西太平洋に位置するヤップ島（1986年に独立したミクロネシア連邦ヤップ州の本島）で足かけ8年のあいだに回を重ねたフィールドワークを中心に、文献や初期録音資料の分析をも加味して構築した音楽学的かつ文化人類学的、歴史学的な民族誌である。また、従来のフィールドワークのある種「傲慢な」態度への警告を発し、「文化について書く」行為の意義が倫理に関わる問題であることを自省的に考察する。序章では、論者が民族音楽学の修養をつむうちに培った「批判的な文化解釈」とも呼ぶべき考え方を提示する。

第1章『『音楽』／『非音楽』の概念』では、多くの音楽民族誌がそうであるように、一部のアウトサイダーによっては音楽とは認められないような文化事象、たとえば死者に向けた泣き語り（ドゥロロイ）や法螺貝吹奏（ヤブル）をも対象に取り込んだうえで、文化の担い手による評価という要素を組み込みつつ、音楽と舞踊の世界を過去から現在にまたがったかたちで眺望する。その長期にわたる観察と判断の過程は、インサイダーとアウトサイダーの視点を複雑に絡み合わせながら論理的かつ体系的に整理した多次元的な分類体系である「ヤップ島音楽・舞踊民族分類表」として集約される。当然そこでは、伝統に由来する歌（タン）や踊り（チュル）はもちろんのこと、1930年代に当地を統治していた日本の影響をきっかけにして始まった新しいジャンル「テンプラウタ」などの表現形態が中心的な位置を占める。それらは、定型化し固定した歌詞で歌われるのを原則とし、社会的に価値あるものとして認知され評価の対象となる。また、インサイダー、アウトサイダーのいずれの場合でも、分類の概念や用語が固定されたものではなく、むしろ時代や個人・集団によって異形を示すものであることが、いわば経験論的に指摘される。

第2章「音楽／非音楽の様式的特徴と歴史的变化」では、主として聴覚的に現実化される音楽という対象を近代科学的な立場から「視覚化」し分析に付する方法と手続きが論じられた後、クレマー（1907）による蟬管録音とそれに基づくヘルツォーク（1936）の採譜をとりあげ、そうした資料が歴史的には価値のあるものではあっても、現代の水準からすればきわめて不十分であることが述べられる。そこで、パフォーマンスに聴かれ見られる多くの側面を取り込んだ「総譜」としての視覚化の方法が提示され、しかもそれがパフォーマンスの一回性を示すものにすぎないことに注意を向ける。こうした厳密な作業を通して、音楽や舞踊の様式が時代とともに変化するばかりか、異文化の影響下で新しいジャンルがつくられるときに、伝統につながる側面が深層に認められることをつきとめる。一例としては、「波状の動き」を感じさせる旋律型が、伝統曲と近代曲の双方に共通するものとして抽出できるのである。

創作、パフォーマンス、伝播、口頭伝承といった実践的側面に焦点をあてた第3章「音楽的パフォーマンスの過程、

脈絡、評価」では、精霊の力と結びつけられていた音楽能力が個人的資質によるものであること、それが経済的利益を伴うこと、正確な歌詞の発音やヴィブラートなしの発声法がよしとされることなどが論じられる。また、サウンドスケープを論じる第4章「音と空間」では、鳥や虫が特殊な伝達機能を備えるとする神話的な音聴取が引き継がれている一方で、「経済発展」とも関連する騒音も無視できないサウンドスケープの一面となっていることを指摘する。

全体を総括する第5章「歴史的音楽民族誌の課題と展望」では、文化の担い手たちにとっては所詮、「書きとめられた」音楽民族誌が限定された意義しかもち得ないことを具体例に即して述べ、生き生きとした「語り」や「歌」の力を再確認するかたちで論を終えている。

(分量 250頁, 400字詰原稿用紙換算約750枚)

論文審査の結果の要旨

民族誌や比較文化論を広く渉猟しつつフィールドワークに従事した論者は、表現文化の本質を言葉や記号の体系で表現するという優れて解釈的な再現行為を本論文で明確に示したとすることができる。換言すれば、民族音楽学がかつて「比較音楽学」と呼ばれていた時代には想像すらできなかった現代的比較文化論のあり方を提示したものとして、音楽学のみならず、広く人文科学全体に問題提起するものである。本論文の第二の特徴としては、「音」の問題を現象的に深く掘り下げるばかりか、身体運動や心理作用、さらに社会や自然といった「音・音楽」の遠近の脈絡にまで拡げて、総体としての文化を論じている。こうした緻密で同時に広範な関心のもち方は、総合大学での音楽学がとるべき道のひとつを示したものとして高く評価されるべきものである。第三に、軽視されがちなオセアニア、とりわけミクロネシアを対象にして人類の文化を理解するうえで欠落しがちな部分を補いつつ、そこから人類全体につながる問題意識を獲得することができたことの意義は大きい。

ただし、本論文にいくつかの短所も見受けられることも否定できない。たとえば、ヤップ本島に隣接し密接な関係を有する中央カロリン文化との関係が論じられておらず、また、ベラウ（パラオ）には触れていてもミクロネシア全体を視野に組み込むことはできていない。また、ヤップが異文化から受けた影響のうちで、日本については説得力をもって論じられているものの、スペイン、ドイツ、アメリカについての配慮が欠けている。

しかしながら、これらの短所はフィールド体験を拡大してゆく過程で補われてゆくべき性質のものであり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。本論文は、一社会の音楽を対象として「歴史的観点」も加味した民族音楽学的研究として従来の水準を超える優れた論考である。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。